

## 第2章 銃後

東京大空襲

# すべてが焼かれてしまった日

紺野 務さんのお話から

○軍需工場 軍隊が必要とするものを作る工場。主に武器やその材料を生産する。

○空襲警報 戦争で敵の飛行機による空襲を市民に知らせ、被害が出ないようにする目的で発令される警報。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るために作った穴や地下室。

○艦載機 航空母艦という戦艦、巡洋艦などに装備され、そこから発着する航空機。

○機銃掃射 機関銃などで敵をなぎ倒すように射撃すること。

○旋盤 工作機械の一つ。工作物を主軸とともに

私は、昭和十八（一九四三）年四月から学徒動員で、軍需工場へ行き、プロペラ機の回転計を作りました。男の人がみんな出征していなくなるので、女性の方が工場で仕事をするようになり、学生も行って応援をしたのです。ここで仕事をしているときに、空襲警報のサイレンがうーつと鳴り、みんなで工場から屋外の防空壕に避難しました。私は、どんな飛行機がどんな風に飛んで来るのか興味があったので、避難する人の最後の方において、艦載機が機銃掃射というダダダーツと機関銃を発射したり、翼の下に積んでいる爆弾をパカッと落とすとどこまで眺めていました。すると、艦載機が自分の方に向かって急降下してきました。自分の方にどんどん飛行機が近づいて来るものですから、これは大変だと、急いで防空壕に避難しました。

あとで見に行ったら、自分たちのいる所から三百メートルくらい離れた工場に爆弾が落ちて、そこにある旋盤という機械が、天井のところまで飛び上がっており、びっくりしました。また、機関銃はどこを撃つたのだろうと見に行つたところ、五十メートルくらい離れたグラウンドに機関砲の弾の痕が一メートル間隔であっているのです。これもまたびっくりしました。

昭和二十（一九四五）年三月十日の空襲は東京大空襲と言われ、B29が三百三十四機、日本に来ました。日本の家は木造の家が多いものですから、まず大きな円を描いて外回りを焼夷弾で燃やし、そのあと円の中に何回か焼夷弾を落とすと、全体が焼けます。これを絨毯爆撃といいました。この日、焼夷弾二千トンが東京に投下されたと言われています。当時の焼夷弾は、四十八の焼夷弾が一つに固まっっていて、およそ地上五百メートル位の所で爆発して落ちてきました。で

に回転させ、往復台上にある刃物を左右前後に動かして切削し、表面切削、ねじ切り、孔あけなどを行う。

○機関砲 弾丸を連続発射する機関銃を大型化したもの。普通口径が二十ミリメートル以上をいう。

○東京大空襲 約十万人が亡くなった昭和二十(一九四五)年三月十日の空襲。空襲があつたのは、深夜○時七分。焼夷弾が投下され、冬の北西の季節風が強かったため、火災が広がり、被害が大きくなった。

○B29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万メートルの高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行

すから、一個の爆弾というより四十八個の焼夷弾が家を焼き尽くすことになりました。

当時、私は、豊島区の西巣鴨に住んでいて、この辺りは直接空襲を受けなかったもので、屋根の物干し台に上がり、日本の飛行機が敵にやられたり、敵の飛行機に体当たりする真夜中の空中戦を眺めていました。高射砲は撃つても届かなかったようです。

そして、四月の十三日から十四日にかけて、今度は三百五十二機のB29が東京に襲いかかってきました。約二十万戸の家が被災に遭い、死者は二千四百人ぐらいになるそうです。

私はこの日も三月十日と同じように物干し台の上で眺めていたのですが、だんだん自分の家の方まで火の燃える状態が近づいて来たものですか、家族全員八名で逃げることにしました。私は六人兄弟の一番上で、中学五年生と二年生、小学校六年と三年生の弟妹たちと赤ん坊がおりました。

まずは、防火用水という、ドラム缶みたいな大きな入れ物に水をためたものの中に、鍋や釜などの台所用品をつけておきました。父と私が布団を抱え、大きな弟が妹たちを連れて、赤ん坊は母親がおぶって逃げ始めました。布団は、家から三百メートルのところにあった病院の前庭にあった防空壕に投げ込んでおきました。



焼夷弾を落とすB29

イメージ図

すべてが焼かれてしまった日

機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

○焼夷弾 火災を引き起こすために作られた爆弾。

○西巣鴨 東京都の北西側よりに位置する東京都豊島区の地域。

○高射砲 敵の航空機の攻撃から守るために作られた大砲。帝国陸軍では高射砲、帝国海軍では高角砲と呼んだ。

○中学五年生 旧制中学校の五年生。現在の高校三年生にあたる。

○櫓 材木などを組み合わせて高く作った構造物。展望用。

逃げ始めた時は、まだ、その辺には焼夷弾が落ちていないので何ともなかったのですが、次第に辺りの様子が変わりました。病院から板橋に向かう途中にあった消防署は焼夷弾で焼けてしまったて、消防署の車庫の上にあった鉄の櫓がぐにやーと曲がってしまいました。そのような状況で、あとは焼けたところを逃げるので、家族全員で手を引いたりなんだりして、できるだけ暗い方、暗い方に向かって歩き出しました。明るい方というのは火で燃えている最中ですからね。道路の両側にある家も焼けてしまっているので、消えた所をそつと歩いて行きました。そして板橋駅の操車場に着き、そこで一息をつきました。操車場は線路が十何本もある広い所なので、火が飛んで来ないのです。

そのうち、私は街の方の火がおさまったようなので、様子を見に行ってみました。すると、防火用水に入ったまま焼け死んでしまった人だとか、衣類は全部焼けてしまった人だとか、そういう人達がごろごろと転がっているのです。これを妹たちに見せるのはよくないと思ひまして、また元の操車場に戻りました。

そして夜の明けるのを待って、家の方に戻りました。操車場から自分の家の方を眺めていますと、そちらは火の上がっている気配が全くないも



焼け野原になった東京

イメージ図



○雑魚寝 大勢の人が雑然と入り混じって寝ること。

○着の身着のまま 着ている着物のほか、何物も持っていないこと。

のですから戻ってみました。我が家へ戻る途中の道路の両側の家は焼けてなくなっていたのですが、自分の家は焼けないで残っているだろうと。それほど立派な家ではなく、木造の家なのですが大丈夫だろうと思い、眠気を吹き飛ばしながら、みんなで歩いたのです。そして、逃げる時に置いてきた布団を見たら、なんともなかったもので、それを担いで、また家の方に向かいました。ところが家に着いてみたら、家の辺は全部焼け野原になっておりまして、家も何も、跡形もない状態になっておりました。そこで、隣の家の広い庭の真ん中辺に防空壕を作っていたのだので、持ってきた布団を防空壕に入れて、そこで、みんなで雑魚寝して過ごしました。隣人は誰も帰って来ておりませんでしたし、私どもの家族だけがぼつんと帰ったような状態で、防空壕の生活を四、五日続けました。自分の家が焼けているということが分かっていいるからかもしれませんが、近所の人達で戻ってくる人は誰もいないのです。親戚の所にでも退避したのでしよう。

実は、我が家の荷物は札幌に送るように荷造りをして、家に置いていたのです。もう一、二日空襲が遅ければ荷物は助かったのですが、全部焼けてしまつて着の身着のままの状態でした。

そのうち交通機関が回復し、川崎にいるおじが来てくれて、家族のうち半分は川崎に行きました。ところが、その川崎も、行った翌日に空襲で焼け野原になってしまいました。

そこで北海道にやって来たのです。私が札幌に到着した日は昭和二十年四月二十九日で、それから長い年月を札幌で過ごしています。

## DATA

平成23年度東区平和事業  
聞き取り

- ・平成23年10月27日
- ・美香保小学校



## 紺野 務(こんの・つとむ)さん

- ・昭和3(1928)年生まれ
- ・札幌市東区在住

すべてが焼かれてしまった日